第165回
日耳鼻長崎県地方部会学術講演会
【プログラム・抄録集】

令和3年4月11日（日）9時30分～

ご案内

昨今の新型コロナウイルス感染症の事情を鑑み、今回は Zoom を使用したオンライン開催とさせていただきます。

【注意事項】

1. ご自宅、ご自身の診療所など通信環境の整った場所からのアクセスをお勧めします。可能であれば有線 LAN でのご利用をお勧めします。
2. 会員以外のアクセスを防止するため、ID やパスコードを他人に教えないでください。
3. 講演会の録画は固くお断りいたします。
4. 出席は端末のアクセス履歴で確認いたします。基本的には一人一端末でご参加ください。
5. 講演会の間、ご自身の端末のマイクとカメラは off にしてください。発言がある場合は挙手していただき、司会・座長から指名されたらマイクとカメラを on にしてご発言ください。
6. 音声が聞こえない、画像が見えないなどトラブルがありましたら、下記までご連絡ください。

【連絡先】

長崎大学耳鼻咽喉科学教室：095−819−7349

演者の方へ

【発表時間】1題10分（発表7分、質疑3分）時間厳守

発表の際には司会・座長の指示に従って、マイクとカメラを on にしてください。

【会長挨拶】9:30～9:35　　熊井良彦（長崎大学）

【一般演題】

第Ⅰ群：9:35～10:15　　座長　小路永聡美（長崎大学）

Ⅰ－1　突発性難聴で紹介された外リンパ瘻の 5 例
吉見龍二（長崎原爆病院）

Ⅰ－2　結核性中耳炎に上咽頭結核を合併した 1 例
小野晋太郎(諫早総合病院）

Ⅰ－3　大村市の一診療所における 2016 年と 2019 年のスギ花粉症患者に処方した抗アレルギー薬の検討
野田哲哉（野田耳鼻咽喉科）

Ⅰ－4　当院における軟骨伝導補聴器の適合例
北岡杏子（長崎大学）

第Ⅱ群：10:15～10:45　　座長　山本昌和（長崎大学）

Ⅱ－1　原発性副甲状腺機能亢進症に対する当院での副甲状腺手術の検討
大久保佑香（佐世保市総合医療センター）

Ⅱ－2　長崎県における化学放射線療法の治療待機期間の検討
松本浩平（長崎医療センター）

Ⅱ－3　導入化学療法における PCE 療法の使用経験
大野純希（長崎大学）

【令和 3 年度日耳鼻長崎県地方部会総会】10:45～11:05　　司会　木原千春

1. 会計報告
2. 連絡事項

【令和2 年度日耳鼻全国会議代表者会議報告】11:05～11:30

1. 保健医療委員会	隈上秀高
2. 学校保健医療委員会	佐々野利春
3. 乳幼児医療委員会	神田幸彦
4. 福祉医療委員会	橋本　清
5. 医事問題委員会	本川浩一
6. 産業・環境保健委員会	金子賢一
7. 専門医制度	吉田晴郎

【連絡事項】　　木原千春（長崎大学）

【一般演題　第Ⅰ群】

Ⅰ－1　突発性難聴で紹介された外リンパ瘻の 5 例

〇吉見龍二、隈上秀高（長崎原爆病院）

外リンパ瘻は重量物運搬や鼻かみ、くしゃみなどの内耳・中耳圧の変化を誘因とし発症し、ポップ音や流水音などが特徴的な症状とされている。しかしながらこれら特徴的な症状を伴う症例は少なく、実際は難聴やめまいなど非特異的な症状のみを呈する場合が多い。

今回前医より突発性難聴として紹介された患者さんで入院後に外リンパ瘻を疑い、手術を行った症例を 5 例経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【参考文献】

1）池園哲郎：外リンパ瘻の診断基準. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2016; 88: 722-727.

2）Brooke Sarna,Mehdi Abouzari, et al.: Perilymphatic Fistula: A Review of Classification, Etiology, Diagnosis, and Treatment. Front. Neurol..2020; 11: 1046

Ⅰ－2　結核性中耳炎に上咽頭結核を合併した１例

〇小野晋太郎、藤山大祐(諫早総合病院)

症例は 76 歳男性、難治性の中耳炎として近医より紹介され、当科を受診。入院して、結核性中耳炎を含めた難治性中耳炎の精査・加療を行っていたが有意な所見を得られなかった。入院 36 日目に鼻腔内耳管咽頭口に粕様白苔を認め、同部位の抗酸菌塗抹検査にて Gaffky5 号と検出されたため、結核病棟に転棟して抗結核薬の投与を開始された。

結核性中耳炎は診断までに時間がかかるケースが多いとの報告があるが、長崎県は国内罹患率ワースト1位を争う結核流行地域でもあることから、難治性中耳炎の鑑別疾患として常に念頭におき、早期の診断を行うための有効な検査・診断について検討した。

【参考文献】

1) 玉江昭裕、他：結核性中耳炎の 3 例. 耳鼻と臨床 2013; 59: 290-297.
2) 公益財団法人結核予防会結核研究所疫学情報センター
http://www.jata.or.jp/rit/ekigaku/ ，参照
3) 古宇田寛子、他：原発性副鼻腔結核の1例. 日耳鼻 2014; 117: 1471-1476.

Ⅰ－3　大村市の一診療所における 2016 年と 2019 年のスギ花粉症患者に処方した抗アレルギー薬の検討

〇野田哲哉（野田耳鼻咽喉科）

当科のスギ花粉飛散数が少なかった 2016 年と飛散数が多かった 2019 年のスギ花粉症の症例に処方した内服と点鼻の抗アレルギー薬を調査し、処方内容を検討した。

2 月上旬から 3 月下旬までの 8 週間での対象者は 2016 年が 540 例で、2019 年が 1,170 例であった。

両年ともに大多数（98％程度）の症例に内服薬を処方しており、点鼻薬は内服薬との併用が多く、その割合は 20％台であった。

内服薬と点鼻薬の組み合わせ処方では、両年ともに内服薬 1 剤、内服薬 2 剤、内服薬 1 剤と点鼻薬の順であった。2016 年の割合はそれぞれ 54.8％、21.9％、15.4％で、2019 年はそれぞれ 38.7％、35.6％、13.5％であった。

内服薬 1 剤では抗ヒスタミン薬が多かったが、フェキソフェナジン塩酸塩・塩酸プソイドエフェドリン配合錠も少なくなかった。内服薬 2 剤では抗ヒスタミン薬と抗ロイコトリエン剤が多く、抗ヒスタミン薬とベタメタゾン・d-クロルフェニラミンマレイン酸塩配合錠の組み合わせもあった。少数ではあるが、内服薬を 3 剤処方した症例があった。点鼻薬の 90％程度は鼻噴霧用ステロイド薬であった。

点鼻薬の処方が少ないのは希望する症例が少ないためであろう。2016 年より 2019 年で内服薬 2 剤の処方割合が高く、抗ロイコトリエン薬の処方が多いのは鼻症状が強い症例が多かったためだと考えられる。

【参考文献】

1）後藤 譲：薬物併用療法の有用性. 日鼻誌 2012; 51: 64－66.
2）野田哲哉、他：長崎県大村市の一診療所における 2016 年と 2019 年のスギ花粉症患者数についての比較検討. 耳鼻咽喉科臨床 2021; 114: 119－125.

Ⅰ－4　当院における軟骨伝導補聴器の適合例

○北岡杏子、小路永聡美、佐藤智生、木原千春、吉田晴郎
熊井良彦（長崎大学）

音の伝導経路についてはこれまで気導、骨導の 2 経路に分類されてきたが、近年、これに加え振動子を耳の軟骨に接触することで良好な聞こえが得られることが発見され、軟骨伝導と名付けられ、研究が進んでいる。この軟骨伝導の特徴は、正常な耳では 1)軟骨骨導経路、2)軟骨気導経路、3)直接気導経路の 3 経路が想定されていることである。

軟骨伝導は医療分野でも軟骨伝導補聴器として応用が開始されており、特に外耳道閉鎖の患者が良い適応とされる。これまでは外耳道閉鎖に対しては、骨導補聴器、あるいは BAHA や人工中耳などで聴力の補償が行われていたが、新しい選択肢である軟骨伝導補聴器は侵襲が少なく、審美性にも優れているとされる。また、潜在化鼓膜や耳漏のコントロールが困難な症例などでも効果が期待されている。当院でも一昨年夏から適合を開始し、まだ症例数は少ないが良好な結果が得られているので、この新しい補聴器である軟骨伝導補聴器についての紹介と当院での経過について報告する。

【参考文献】

1) 西村忠己:軟骨伝導補聴器の特徴と適応. 日耳鼻 2018; 121: 1306-1308.

【一般演題　第Ⅱ群】

Ⅱ－1　原発性副甲状腺機能亢進症に対する当院での副甲状腺手術の検討

〇大久保佑香、桂　資泰、吉田　翔、前田耕太郎（佐世保市総合医療センター）
安達朝幸（長崎労災病院）

【はじめに】

原発性副甲状腺機能亢進症は副甲状腺ホルモン（PTH）が過剰に分泌され高 Ca 血症から様々な症状を引き起こす疾患であり、約 85%が副甲状腺腺腫によるものとされる。また近年では超音波検査や PTH の測定精度の向上から臨床症状のない無症候性副甲状腺機能亢進症を耳鼻咽喉科医が診療する機会が増加している。根治治療は手術による責任病巣の摘出である。術前の検査として責任病巣の同定には MIBI シンチや超音波検査、CT 等で行うが同定することが困難な症例も報告されている。

今回我々は当科で手術治療を行った原発性副甲状腺機能亢進症について検討し文献的考察を加えて報告する。

【対象】

2016 年から 2020 年までに当科で行った原発性副甲状腺機能亢進症に対して手術を行った 12 症例を対象とし術前診断、術式、病理診断、術後合併症などについて検討を行った。

【結果】

男性 0 名、女性 12 名、年齢は 19 歳から 82 歳（平均 60.8 歳）であった。

術前に責任病巣が同定し得なかった症例は 1 例であった。術式は腺腫のみ摘出を行った症例が 6 例で甲状腺合併切除を行った症例が 6 例であった。

術中に補助診断として PTH 測定を行った症例は 2 例であった。

術後の病理診断は腺腫 10 例、癌 1 例、その他 1 例であった。全例で PTH、Ca 値の低下が得られていたが術後に一過性に Ca 製剤の投与を要した症例が 1 例に認められた。合併症については一過性反回神経麻痺が 2 例に認められた。

【考察】

術前に MIBI シンチ、超音波検査等を組み合わせることで病巣の同定をおこない全例で Ca 値は低下し治療効果が得られていた。よって、今回の検討では適切に術前診断が行えていたといえる。ただし、責任病巣の判断に迷った症例もあったため最近の 2 症例で導入した術中の PTH 測定による確認は今後も継続していく方針である。また、今回の検討では長期に Ca 製剤の補充を必要とする症例は認めなかったが術前の患者説明など注意が必要だと思われた。

【参考文献】

1）杉野公則、他：甲状腺・副甲状腺手術における術中迅速 PTH 測定の有用性. 日本内分泌・甲状腺外科学会誌 2013; 30: 201-206.

Ⅱ－2　長崎県における化学放射線療法の治療待機期間の検討

○松本浩平、近松春奈、山本昌和、田中藤信（長崎医療センター）
佐藤智生、熊井良彦（長崎大学）

【はじめに】

頭頸部扁平上皮癌に対する放射線治療において、治療開始の遅延は予後に影響することが明らかにされている。よって、治療開始の遅延をきたす要因を明らかにし、その対策を講じることで、頭頸部扁平上皮癌の予後改善につながる可能性がある。特に、長崎県は日本国内で最多の離島を有しており、他の医療圏と比較しても特殊な環境といえる。長崎県における今後の頭頸部癌診療を考えるうえで、所在地による治療開始遅延や、生命予後への影響がないか、離島医療圏の現状を把握する必要があると考えた。

【対象・方法】

診療録を用いて後方視的に検討した。2013 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日（6年間）の期間に長崎大学病院耳鼻咽喉科で新規に放射線治療または化学放射線治療を施行した頭頸部扁平上皮癌症例を対象とした。初診日～治療開始日までの期間を治療待機期間と定義して、所在地、初診診療科、原発部位などの要因が治療待機期間に与える影響を検討した。さらに、再発をエンドポイントとし、各要因の再発リスクを検討した。

【結果・考察】

初診診療科、原発部位は治療待機期間に影響を与える要因であった。僻地は都市と比較して治療待機期間中央値が 16 日長かったが、統計学的な有意差はなかった。Stage、原発部位は再発リスクに寄与する要因であった。それ以外の要因は有意差を認めなかったが、観察期間を延ばすことで、初診診療科、所在地は生命予後への影響が明らかになる可能性がある。

【参考文献】

1）Jensen Anni Ravnsbaek, et al: Tumor progression in waiting time for radiotherapy in head and neck cancer. Radiotherapy and oncology 2007; 84: 5-10.
2）Atanu Bhattacharjee, et al: Impact of waiting time for treatment on survival in patients undergoing radiotherapy for head and neck cancer. Journal of Cancer Policy 2017; 13: 1-4.
3）Michel C. van Harten, et al: Determinants of treatment waiting times for head and neck cancer in the Netherlands and their relation to survival. Oral Oncology 2015; 51: 272-278.

Ⅱ-3　導入化学療法における PCE 療法の使用経験

〇大野純希、西　秀昭、髙島寿美恵、副島駿太郎、熊井良彦（長崎大学）

従来、進行頭頸部癌に対する導入化学療法の標準的なレジメンは TPF 療法(docetaxel＋cisplatin＋5-fluorouracil)であった。著効する例も経験する一方、生命予後の延長に寄与するというエビデンスに乏しく、その強い毒性からも適応を慎重に検討する必要があった。

近年、新たな導入化学療法として PCE 療法(Paclitaxel＋Carboplatin＋Erbitux)が注目されている。奏効率、治療完遂率ともに高く、有害事象も TPF 療法と比較し軽度であることが報告されており、当科でも 2020 年度より採用している。現在 3 例を経験し、いずれも良好な経過をたどっている。当科における PCE 療法の使用経験につき、特に著効した 1 例を提示するとともに、文献的考察を加え報告する。

【参考文献】

1） Takenaka M. et al: Feasibility of Combination of Paclitaxel, Carboplatin, and Cetuximab as Induction Chemotherapy for Advanced Head and Neck Squamous Cell Carcinoma. Clinics in Oncology, 2019; 4: 1657.